資料２

食品ロス削減に向けた取組について

食品ロス削減推進計画
（令和4年12月策定）

2017年度を基準として、2030年度までに達成すべき目標を設定
①食品ロスの20%を削減する
②外食で食品ロス削減の取組をしている市民の割合が80%以上とする

－令和4年度の取組－

フードドライブ
10月に室蘭市役所やモルエ中島、イオン室蘭店にて実施。集まった食品689点（191.0kg）は社会福祉協議会へ寄付した。

防災訓練での活用
防災訓練に参加した町会などに対し、賞味期限の近い備蓄食品を配布。25団体458人に対し、備蓄食品を配布した。

食育フェス
親子への食育を図ることを目的に、小学生とその保護者を対象に開催。夏休み期間に開催し、自由研究として活用できるよう講話やゲーム、調理実習を実施。

－令和5年度の取組予定－

フードドライブ
10月に室蘭市役所や市内商業施設にて実施予定。

食育フェス
7月に実施。食品ロス削減の取組をさいころに記載し、家庭での取組を促す「食品ロスさいころ」を作成した。

防災訓練での活用
訓練に参加した町会に賞味期限の近い備蓄食品を配布するとともに、食品ロス削減に向けた意識啓発を実施する。

普及啓発
公共施設へのポスター掲示を行うほか、市民向けセミナーや各種イベントでの啓発を通じて、食品ロス削減に向けた意識を醸成する。

－生ごみ処理機等購入助成状況とアンケート結果－

家庭における生ごみ減量支援策として、生ごみ堆肥化容器や電動生ごみ処理機の購入費用の一部を助成。また、購入助成者に対してアンケート調査を実施した。

(令和4年度助成実績)

	申込件数	助成件数	助成額
生ごみ堆肥化容器	126	103	198,400
電動生ごみ処理機	64	43	673,000
合　　計	190	146	871,400

《利用者へのアンケート結果》

〇助成制度・助成額に対する意見

・以前から購入を考えていたが、助成金をきっかけに購入できて良かった。
・電動生ごみ処理機は高額なため、助成金がなければ購入する気にならなかった。
・店頭に特定のメーカーや機種しかなく、選択肢が少なかった。
・電動生ごみ処理機が欲しかったものの、高額でお金が足りなかった。
・助成があるのは助かるが、電動生ごみ処理機を買うのに上限額2万円は少ない。

〇生ごみ処理機等を利用しての感想

（生ごみ堆肥化容器）
・生ごみや雑草をごみとして出すことが減った。
・良い土や堆肥ができるのでよい。家庭菜園で堆肥として使用している。
・堆肥化に時間がかかるほか、冬期の利用方法がわからない。

（電動生ごみ処理機）
・処理の音も気にならず、生ごみも乾燥するので、臭いがなくてとても良い。
・思っていたよりも水分が抜けてよい。
・処理機の容量が小さく、足りなかった。

お供え物の処分の方法に関するアンケートの実施結果について

寺院に対するアンケートの実施

第13回あり方検討委員会において、委員から「市内の寺院で廃棄されるお供え物を社会福祉協議会や子ども食堂に提供する取組が行われている。食品ロス削減に向けた取組として、他の寺院に取組を広げられないか」との意見が出たことを受け、市内39寺に対し、「お供え物の処分方法などに関するアンケート調査」を実施した。

アンケート結果について

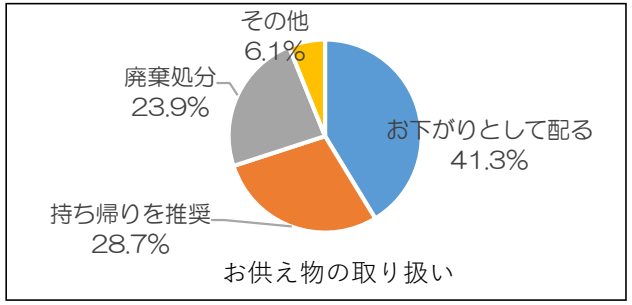
《アンケートの概要》

調査期間：令和5年6月5日～6月23日（19日間）　　調査対象：室蘭市内にある寺院　39寺　　回答率：71.8%（28/39寺）

《アンケートの結果（抜粋）》

1．お供え物の取り扱いとその理由について

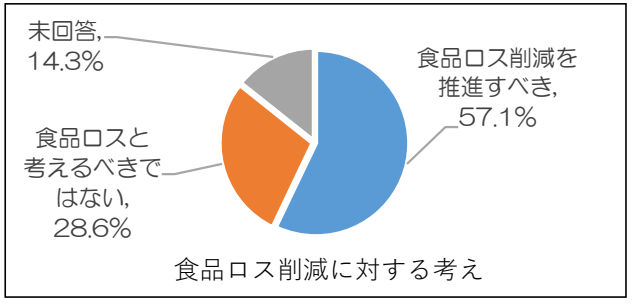
お供え物の多くは「果物」や「お菓子」などの食品であった。
余ったお供え物の処理について、**「お下がりとして配る」が41.3%**、**「持ち帰り」が28.7%**であった。
一方で**「廃棄処分」が23.9%**となり、多くのお供え物が廃棄されていることがわかった。
また、可燃ごみ量については、お盆やお彼岸が最もごみ量が増えることが分かった。



お供え物の取り扱い

2．お供え物の食品ロス削減に対する考えについて

57.1%が「食品ロス削減を推進すべき」、**28.6%が「お供え物を食品ロスと考えるべきではない」**と回答した。
「食品ロス削減を推進すべき」と回答した寺院の多くは「捨てることがもったいない」との意見であった。
一方で「お供え物を食品ロスと考えるべきではない」と回答した寺院からは「故人に対する感謝の思いを供物に添えてお供えしている」、「亡き先祖のために供えるものであり、単純に食品ロスに当てはめるのは少々乱暴」との意見が寄せられた。



食品ロス削減に対する考え

3．寺院でできる取組や市に取り組んでもらいたいことについて

（寺院でできる取組）
- 賞味期限が長い品物をお供えしてもらう。
- 檀家、檀信徒へ配る。
- 持ち帰りについて配布物や掲示板での周知を行う。

（市に取り組んでもらいたいこと）
- 「生きている人のお供物を考えてみませんか？」との内容で啓発をしたらどうか。
- 広報紙などでお供え物を持ち帰るよう啓発してほしい。
- お彼岸やお盆のときに菓子や果物をもらってくれる施設など情報提供があると助かる。
- 寺院で考えるべき問題で市が介入すべきではないように思う。
- 行政の後押しと周知により、一般の方々や寺院の理解が得られるのではないか。